植草学園短期大学研究紀要　第11号　29～36頁（2010）

# 児童養護施設における子どもたちの生活
## ～児童養護施設への訪問を通して～

# The Everyday Life of the Child in Children's Home

田村　弥生[1]　　相磯　友子[2]

本稿は、参加観察を通して児童養護施設における子どもたちの生活の一端を明らかにすることを目的としたものである。2008年10月から12月にかけて参加観察を10回実施した。その結果、児童養護施設では、子どもたち同士の関係、子どもと職員との関係が、子どもたちの生活に重要な役割を果たしていると考えられた。子ども同士の関係では、子ども同士のルールが存在した。これは、集団生活において互いが気持ちよく生活するためのものであると考えられた。子どもと職員との関係では、強い信頼関係が築かれていることが推察された。このような信頼関係は、職員と子どもたちが同じ空間で遊ぶことを通して築かれていると考えられる。子どもたちは施設のみにとどまらず、学校の友だち等との繋がりや、餅つき大会等のイベントを通じての地域との交流、また、帰省等を通じて家庭とも繋がりを持っていることが明らかとなった。

**キーワード：**児童養護施設、子どもたちの生活、参加観察

## １．問題と目的

筆者が児童養護施設について知ったのは、短大での「養護原理」「養護内容演習」をはじめとする講義を通してである。講義において「児童養護施設」がどのような所であるか、どのような活動がされているのか等、施設での生活に関することを短大の先生から学んだ。

児童養護施設に深く興味を持った筆者は、実際に訪問し、子どもたちや職員の方々とのかかわりの中で児童養護施設での生活や子どもたちと職員の方とのかかわりを参加観察する機会を得た。

児童養護施設の子どもたちの生活については、子どもたちの「語り」から、児童養護施設における生活が描かれてきた[1) 2)]。しかし、本研究では、実際の訪問を通して、そもそも児童養護施設における子どもたちの生活はどのようなもので、子どもたちと職員はどのようなかかわりを持っているのか、児童養護施設における子どもたちの「生活」を捉えることを目的とした。それは、子どもたちの「語り」からは見えない、児童養護施設における子どもたちの実際の生活の一端を明らかにしたいと考えたからである。

以上のことから、本研究では、参加観察を通して児童養護施設における生活の一端を明らかにすることを目的とする。

## ２．研究方法

本研究では、児童養護施設における子どもたちの生活を探るため、研究方法として参加観察を採用した。

### (1) 参加観察の概要

期間：期間は、2008年10月25日から12月27日までの毎土曜日の10日間であった。１回の参加観

1 植草学園短期大学特別支援専攻科
2 植草学園短期大学

察時間は、午前９時から17時までの８時間であった。

参加観察の手順：対象の児童養護施設には、研究目的を説明した上で、子どもたちのプライバシーには十分配慮することを伝え、ボランティアを行いながらの参加観察の許可を得た。観察の焦点は、まず前半５回の参加観察では、施設での一日の生活の流れを把握し、少しでも多くの子どもたちとかかわる事を目的とした。また、後半５回の参加観察では職員から子どもたちへの働きかけにも注目し、活動を通した子どもたちの様子から、施設ならではの良さを考えることを目的とした。

### (2) 対象児童養護施設の概要

対象は関東圏に所在し、約40名の子どもたちが生活をしている児童養護施設である。それぞれの部屋には職員が常時１～３名勤務されており、子どもたちの日々の生活を支えている。

### (3) 対象者の概要

本研究の対象者は太陽の部屋（仮名）の子どもたちと職員である。なお、対象の子どもたちと職員の名前は、すべて仮名である。

**表１　太陽の部屋の子どもの概要**

| |
|---|
| **・ケンタ君　（男子，小学校高学年）**<br>・マナミさんやミキさんのことを気にかけているようで、よく言葉をかけていた。<br>（「元気？」と調子を訊く、掃除開始の呼びかけ　等）<br>・ミノル君と一緒に職員のお手伝い（お餅つき）を積極的に行なっていた。 |
| **・ミノル君　（男子，小学校高学年）**<br>・ジュン君の二重跳びを見て、縄跳びの練習を頑張っていた。<br>・小学校校庭でのキャッチボールなど、身体を動かすことが好きな様子。 |
| **・カナさん　（女子，小学校高学年）**<br>・子どもたち（女子）がいけない事をした時に、注意をしていた。<br>・お餅つきや大掃除にも積極的に参加している様子がみられ、任された事をしっかりと行なっていた。 |
| **・ユキエさん　（女子，小学校中学年）**<br>・「嫌だ」「○○がしたい」と、はっきりと意思を伝えることが多くみられた。<br>・マナミさんやミキさんから、「一緒に来て」と頻繁に遊びへ誘われていた。 |
| **・アヤさん　（女子，小学校中学年）**<br>・みんなと一緒に遊ぶことを好む様子がみられた。 |
| **・マナミさん　（女子、幼稚園年長）**<br>・筆者とのかかわりが最も多かった。<br>・ミキさんにとっては「お姉ちゃん」のような存在。 |
| **・ミキさん　　（女子，幼稚園年中）**<br>・職員や筆者のそばに居たり、マナミさんや他の子に甘えている様子が多々みられた。<br>・職員や筆者に、抱っこ、おんぶを頼んでいることが多い。 |

**表２　太陽の部屋の職員の概要**

| |
|---|
| **・小山先生　（女性，「小山っち」「小山さん」と呼ばれている）**<br>・子どもたちとも向き合って話し、干渉しすぎない関わり方をしていた。<br>・子どもたちがいさかいを起こしていても、危険のない限り見守っていた。<br>・自ら盛り上げる事で、子どもたちを楽しませていた。（お餅つき大会） |
| **・佐藤先生　（男性，太陽のお部屋，「佐藤っち」佐藤さん）と呼ばれている）**<br>・おんぶをしたり、体を使って子どもたちと遊んでいた。<br>・子ども同士のいさかいには、両者の言い分をしっかりと聞いて、言葉をかけていた。<br>・子どもたちの前で、一緒にキーボードを弾いていた。 |

### (4) 筆者の参加観察における立場

訪問時には、筆者は子どもたちから「弥生さん」等の名前や「お姉さん」と呼ばれた。子どもたちと筆者とのかかわりは、実習生に近い立場であった。

筆者は今までに児童養護施設へ訪問をした経験が無いため、まずは職員から一人ひとりの子どもたちへのかかわり方を学び、筆者自身も積極的にかかわるようにした。様々な思いを持つ子どもたちに受け入れられるにはどのような事が大切であるのか、ま

た、職員は生活を通してどのような事に工夫をされているのかを、観察するようにした。

## ３．結果と考察

### ⑴ 子どもと筆者の関わり

#### １）子どもと筆者の関係の深まり

〈エピソード１－１〉
「明日来る？」「２か月だけなの？」と子どもたちから筆者へ聞いていた。
（１回目の訪問　2008年10月25日　17：00頃）

〈エピソード１－２〉
「明日また遊ぼうね」と言うミキさん、子どもたちに「また来週の土曜日に来るね、また遊ぼう」と筆者が伝える。
（６回目の訪問　2008年11月29日　17：00頃）

〈エピソード１－３〉
「おはようございます」と言った筆者に対し、ユキエさんは「ございますは、いらないよう」と言う。筆者が「おはよう」と言い直すと、笑顔で「おはよう」と応えてくれていた。
（９回目の訪問　2008年12月20日　９：00頃）

子どもたちにも少々緊張や戸惑いが感じられた初日だが、筆者が帰宅する際にはエピソード１－１のように「明日来る？」「２か月だけなの？」と子どもたちから訊いてくるなど、筆者に対して少しずつ興味を持っているような様子がわかった。また、訪問期間の前半では明日は来るのか、いつまで来るのかを気にしていた様子の子どもたちだが、後半はそのような質問は少なくなっていった。

初めて筆者と会った時には子どもたちに「誰だろう」「どんな人だろう」等と疑問がうまれ、話しかけてくることも多かったと思われる。筆者に慣れてからは、筆者の訪問が12月までとわかり、「また来週も来る」という期待や、「おはよう」「またね」と日常的な会話へと変化していったと考える。また、「ございますは、いらないよう」といったユキエさんの言葉からは、12月に入って筆者との会話にも慣れていったことが伺える。

#### ２）子どもたちによる筆者の取り合い

〈エピソード１－４〉
マナミさんが筆者の手を引き、ユキエさんも誘ってお部屋で遊ぶ。
マナミさんとユキエさんが話し合い、赤ちゃんの人形を使ってお医者さんごっこが始まる。「ユキ（ユキエさん）は、病気の赤ちゃんを連れてきたのね」「マナミは看護師さんね」と、マナミさんが遊びを積極的に仕切っている。≪年上であるユキエさんは、一緒に遊ぶというよりもマナミさんに合わせて相手をしているというような雰囲気を感じた≫マナミさんと向き合う筆者であるが、ユキエさんも筆者に対して「ポポちゃん（赤ちゃんの人形）の服、かわいいよね」 等と話しかけている。
少しずつ、マナミさんとの関わりよりもユキエさんの方が強い関わりになる。「もう弥生さんと遊ばないもん」と言ったマナミさんは部屋を出る。ユキエさんは、「リビング行こう」と筆者の手を引き、一緒に向かう。リビングに居たマナミさんが走って部屋へと戻り、「遊ばないって言ったじゃん」と部屋にこもる。
（３回目の訪問　2008年11月８日　10：00頃）

訪問前半、筆者と一緒に居ることが多いマナミさんとユキエさんの２人に対し、平等に関わることが出来ると考え、積極的に関わりたいと考えていた。しかし、同じ場所で一緒に遊んでいると関わりがどうしてもどちらか１人へと集中してしまう。そのため、自分と１対１になれない筆者に反発している様子がマナミさんにみられた。エピソード１―４のように、筆者に対して興味を持ちつつマナミさんは「弥生さんと遊ばない」「あっち行って」と言っていた。

筆者は２人と向き合って気持ちを理解しようと考えていたが、まずは筆者が子どもたちの行動を「待つ」ように意識を変化させることにより、子どもたちが筆者を取り合うことが減った。

筆者が複数の子どもたちへ同時に話しかけると、一人ひとりとのかかわりも減り、まわりの子は「もっと自分のことを見てほしい」いう気持ちになる。一方、筆者が話しかける子は「あまり干渉され

たくない」という気持ちになることもある。そのため、筆者が待ち、子どもたちから話したい時に話せる、遊びたい時に遊べる環境をつくることで、子どもたちの気持ちも窮屈にならず、ある程度距離感のある関係性をつくれることができると思われる。

### 3）男子と筆者のかかわり

〈エピソード１－５〉

小山先生から、一日かけてでも掃除をするよう伝えられたミノル君は、トイレ掃除と布団干しを済ませ、部屋の片付けを筆者と一緒に行なう。「汚い所を言って」と言っていたミノル君へ、筆者が「ここが少し汚いかな」と言うと、ミノル君は「甘いよ、はっきり汚いって言っちゃって良いよ」と言う。その言葉に「わかった」と筆者は返事した。

筆者が「ここは？」と汚い所を指摘し、ミノル君と一緒に掃除、整理整頓をする。

大切なものにはミノル君が整理整頓をする。要るもの、要らないものはミノル君本人が判別し、ゴミ袋へ捨てる。

（７回目の訪問　2008年11月６日　９：20頃）

子どもたちから話し掛けてくれる女の子に対し、男の子とは訪問を通して関わりが少ないように感じた。中でもミノル君とは、「おはよう」「ありがとう」などの会話は交わすものの、気持ちを打ち明けるような会話は少ないように感じていた。

しかし、12月６日に小山先生からの指示でミノル君のお部屋掃除をすることになった。その際に「はっきり言っちゃって良いよ」「甘いよ」と言っていたミノル君の言葉から、ミノル君が普段から筆者のことをしっかりと見てくれ、気にかけていた事に気づいた。

後半では、１対１でなくても生活をもとに会話を交わすことで、男子から話し掛けてくれることも多くなることを感じた。例えば、12月13日の訪問で本棚の整理をしていた際、筆者へ「俺、○○の漫画が好きなんだ」と話しかけたミノル君の言葉をきっかけに筆者も好きな漫画の事を話した。その後、みんなで自分の好きな漫画の話をしながら片付けを行っていた為、黙々と行っていた本棚の整理が楽しい雰囲気に変化していた。この時に、男子と筆者が楽しく会話を交わすことができたのは、間にユキエさんやマナミさん等の女子の存在があったからなのではと考えられる。男子と、訪問して間もない筆者の会話は、長くは続かなかった。そのため、男子と筆者の間にかかわりの深い女子が会話を盛り上げることで、何気ない会話が楽しい雰囲気に変化していたと考える。

また、職員と異性の子どもたちとの関わり方を比較して観察すると、言葉掛けの面では同性の子どもたちとあまり変わらない関わり方をしているように見受けられた。しかし同性同士と比較すると、異性同士で共に活動をする場面は少ないようだった。異性であっても、みんなで一緒にスポーツを楽しむ時など集団で行う活動をきっかけとした関わりが多くみられた。

### 4）「みんなと同じ」を望む子どもたち

〈エピソード１－６〉みんなで縄跳び

太陽のお部屋の前では、ユキエさんと他のお部屋のアカネさんが縄跳びを持ってきて、アカネさんが筆者に「数えてて」と言うと、隣のユキエさんも「私も数えてて」と言う。

徐々に、縄跳びを持って集まってくる子が増え、「僕、二重跳びが出来るよ」「俺は２重とびのはやぶさが出来るよ」と、周りの子や筆者に言う。

（10回目の訪問　2008年12月27日　12：00頃）

子どもたちの関わりの中では、縄跳び等を披露するので「見てて」と言いに来る子どもたちがみられた。その度に筆者は、言われたとおりに跳んだ数をかぞえたり、「上手だね」等と誉めた。すると、子どもたちが集まり「僕も見て」「私も」と順に筆者へ縄跳びを披露した。目の前に縄跳びをしている子が居れば、「私もやろうかな」という気持ちがわき、誰かが「上手だね」「さすがだね」と褒められていれば、「私のことも見て」という気持ちになるのだと考える。

子どもたちの上記のような行動は、職員に対しても行なわれていた。友だちが職員に見てもらっていると「僕も」「私も」と詰め掛け、みんなと同じことを望む様子が見られた。

### (2) トラブルが起きた時の対応

〈エピソード２－１〉

**上履きを洗いにいけなかったミキさんへの、子どもたちと職員の言葉かけ**

小山先生から、上履きを洗いに行くよう伝えられたミキさんは上履きを洗いに筆者と一緒に外へ向かった。工事のため、諦めてお部屋に戻ってきた後、リビングでお勉強をしている子どもたちにつられて一緒にその場に座る。

しかし、ミキさんが今やるべきことを把握している子どもたちから、上履きを洗うよう促されていた。ようやく洗いに言ったミキさんは、「時間が遅い」と小山先生に怒られてしまう。最終的には自分で洗いに行き、小山先生にも自分の言葉で報告をしていた。

（６回目の訪問　2008年11月29日　９：20頃）

〈エピソード２－２〉

**遊びに行きたかったミキさんと職員の対応**

渡辺先生が、午後に小学校４年生以上の男の子を連れて野球をしに地域の小学校へ行こうかと呼びかける。その話にミキさんが反応し、「ミキも行きたい」と言う。

周りのみんなから、「ミキは年中だから行けないよ」と言われる。

ミキさんは、持っていた箸を正面に居たマナミさんに向かって投げる。渡辺先生が、「箸は人に向かって投げるものではないこと、もし今マナミさんに当たっていたら痛いこと」を伝える。渡辺先生は、泣き出してしまったミキさんの気持ちを落ち着かせるため、ミキさんの部屋で２人で向きあい、話し合う。

（３日目の訪問　2008年11月８日　12：00頃）

〈エピソード２－３〉

**積み木を貸すことを拒んだミキさんと職員の対応**

ミキさんと筆者が積み木で遊んでいると、マナミさんが来て、「ミキ、終わったら貸して」と言う。「嫌だ」とミキさんが言う様子を見ていた佐藤先生から、「別にマナミちゃんは、今貸してって言ってるんじゃなくて、ミキちゃんが終わったらって言ってるから貸してあげた方が良いと思うよ」と言うと、ミキさんは、「だってミキが使ってるんだもん」と言う。その言葉に対し、「積み木はみんなのものだよ、大切に使おう」と佐藤先生。佐藤先生の説得によって、「いいよ」とミキさん。一緒に遊ぶマナミさんとミキさんは、積み木でロケットや家を作り、楽しんでいる様子だった。

（８回目の訪問　2008年12月13日　13；00頃）

筆者が抜粋した３つのエピソードには全て職員が関わり、対応をしている。３つのエピソードから、子どもたちがしてしまった「いけない」ことを伝えるよりも、今どうするべきであったか、他者からの意見としてのアドバイスやそれをしてしまったらどうなるかを話すほうが、子どもたちにも伝わりやすいと思われた。

まず、エピソード２－１は、次にすべきことを伝えていたのに、ほかのことをしていて遅くなってしまったというエピソードである。このエピソードでは、他の子どもたちによる呼びかけも加わっていたため、今までの事実を本人と一緒に振り返り、どうすればよかったのかを職員が伝えている。

次にエピソード２－２では、危ない行為をしてしまった子に対して、「もし、もっと危険な状況であったらもっと危険であること」「そもそも今の行為は、してはいけないこと」を、しっかりと向き合って話をしている。また、泣いてしまった場合には落ち着く部屋で向き合い、話し合っている。

そしてエピソード２－３では、いさかいを起こしている２人に対して、冷静に職員の意見を述べ、両者の思いを言葉にしたうえでアドバイスをしている。

３つのエピソードを通して、トラブルが起こってしまった時は、まず冷静に振り返る時間を設け、子どもの気持ちを受容しつつ、子ども自身の力で「何がいけなかったのか」を考えられるよう導くことが大切であると感じた。

子どもたちの家庭でもある児童養護施設では、社会へ出て生きるために職員から「大人の考え」としてアドバイスをしているように思われる。もし子どもたちが「それはいけない事だよ」とだけ伝えられていたら、もう一度繰り返してしまうかもしれないが、次はどうすればいいのか、今からどうすれば良いのかを言葉として伝えることで、子どもたちが同じ行動を繰り返さないように支援していると考えられる。その際に、本人を責めるのではなく、気持ちを

しっかりと受け止めることで、子どもたちが落ち着いて考えられるようにしているのではないかと感じた。

エピソード２－１でもあげたように、施設では職員に協力して子どもたち同士でも呼びかけが行われていた。「いいこと」「いけないこと」をしっかりと言いあえる友だちが居ること、そしてトラブルが起きても時間をかけて落ち着いた心で話し合える職員が居ることが、施設の特徴の一つであると考えられる。

### (3) 子ども同士の関係

#### １）事前の約束なく始まる遊び

〈エピソード３－１〉
掃除終了後、おままごとセットを持ち出し、アヤさん、ユキエさん、マナミさんが遊ぶ。「弥生さんもやろうよ」と言葉をかけるミキさんが来て「私もやりたい、いれて」とアヤさんへ伝える。その後、筆者も含めた５人でおままごとセットを使って遊んだ。
（２回目の訪問　2008年11月１日　10：00頃）

子どもたちの遊びには「事前の約束」は見られず、好きな遊びを個々にしていく中で自然と仲間に入っていき、自然と遊びの集団が出来ていた。子どもたちが通っている学校では、と考えると、下校時に友だちと遊ぶ約束を交わし、お互いに時間と場所を決めたうえで遊びに移行するのではないだろうか。しかし子どもたちは、実際に園庭やリビングに来た上で興味のもったものに取り組み、同じ気持ちの子どもは「いれて」と承諾を得てから遊びに加わっていた。「あの子と遊びたい」ではなく、「この遊びがしたい」という子どもたちが同じ思いを抱えて徐々に集団となり、次第に隣り合ったみんなで一緒に遊ぶという事が、子どもたちの遊び方であった。

#### ２）子ども同士のルール

〈エピソード３－２〉
「千と千尋の神隠し」のＤＶＤを、ソファに座って観る。
毛布を持ってきたケンタ君は、遊びにきたほかのお部屋の男子２人と一緒に毛布にくるまって観ている。「女子は入んないでね」と言う。
（３回目の訪問　2008年11月８日　12：30頃）

〈エピソード３－３〉
施設前では、カナさん、ユキエさん、アヤさんと、他のお部屋のサトシ君、シオリさん達が、縄を使ってゴム跳びをしている。他の部屋の２～４歳位の子数名が、「入れて」と言わずに参加している様子が度々見られたが、その度に年上のカナさん、ユキエさん、アヤさんは「入んないで」と言う。
他の子も「あ～、入れてって言ってないのに、やってる」と言う。２～４歳の子は驚きつつも「入れて」と言い、遊びに加わった。
（８回目の訪問　2008年12月13日　11：30頃）

エピソード３－２のように、温かい毛布に包まっているケンタ君が「女子は入んないでね」と言っていた事や、エピソード３－３のように「入れてって言ってないのに入ってる」と注意を促していた事等から、遊びの中にも子どもたち独自のルールがあることが推察された。それは単に遊びを独占したりほかの子を抑制しようという意味ではなく、お互いが気持よく遊ぶためのルールの一つでもあると考えられる。そのルールを少しでも守れなかった小さい子は、大きい子から注意を受けることでルールは伝えられていた。

また、ルールは遊びだけでなく施設の生活の中でも随所に見られ、共通のルールをみんなで守ることで様々な活動が成立していると考えられる。

### (4) 子どもたちと職員の同じ空間での遊び

〈エピソード４－１〉
地域にある小学校の校庭を使い、ケンタ君、ミノル君、小山先生はグローブとバットで打ち込みをして遊び、女の子と筆者はタイヤを跳んで遊んだ。
長縄を束ね、縄跳びのように跳んでいたナオコさんへ、小山先生から「長縄やろうか」と言葉を掛ける。長縄で郵便屋さんの落とし物　８の字跳びをする。
ミキさんは、「お姉さん、一緒にドングリを集めよう」と、筆者と一緒に両手にいっぱいのドングリを集める。ケンタ君は、校庭で行われているサッカーの様子を見ている。

時間をみて、「帰ろうか」と小山先生。時間が延び、遅くなってしまったことをうけて、「言い訳をするよりも、まずごめんなさいと謝ることが大切だよ」と小山先生が子どもたちに話す。子どもたちは「うん」と答えていた。

（６回目の訪問　2008年11月29日　15：30頃）

〈エピソード４－２〉

おやつ後、休憩を少々とってから園庭にて長縄跳びを行なう。（他の部屋の子〔シオリさん、サトシ君、ユウジ君、モモコさん〕も集まり、みんなで長縄をする）

・跳びながら「世界のナベアツ」の真似をする。（３の倍数を言う）
・２人で一緒に跳ぶ。
・九九を言いながら跳ぶ（小さい子が跳ぶ時は、周りの子が九九を言う。）
・時間が過ぎ、「３回引っかかったら抜けてね」というルールを子どもたちがつくる（みんなが「良いよ」と応える）（引っかかりやすい小さい子（小学生以下の子）は、カウントしない）

（７回目の訪問　2008年12月６日　15：30頃）

１つのお部屋の中でも、男女の差や年齢差はあるものの、時に関係なくひとつの集団として遊んでいる場面が度々みられた。その前には、ほとんどの場合に職員からの呼びかけが大きく関わっている。職員の呼びかけによって集まった子どもたちが大縄跳びを始めたとすれば、「好きな花を言おうよ」「九九を言おう」というルールが、子どもたちと職員の間で自然に交わされている。また、年齢差に応じて「３回引っかかったら抜けてね、でも、小さい子はカウントしなくて良いよ」と、全員が気持ち良く、かつ真剣に取り組める遊びが子どもたちの中でも展開されている。

また、遊びには決して「強制」が無いように見受けられた。例えば11月29日の事例のように、みんなで一緒に施設外へ遊びに行き、その場所では職員が「キャッチボールしよう」「長縄やろう」と呼びかけているが、決して全員がキャッチボールや長縄跳びに参加している訳ではなく、まわりでドングリを拾う子が居れば、サッカーを見ている子も居た。

短く折った長縄で遊んでいたナオコさんへ「長縄やろうか」と呼びかけていた職員のように、子どもたちが「やりたい」と思うことを行動やしぐさからも読み取り、遊びに入らない子が持つ興味をも優先して考えつつ遊びを提供していた。職員自らも楽しむ事が、子どもたちと関わる上で大切なことであると考えられる。また、子どもたちと職員が同じ空間で遊ぶことで楽しさを共有でき、繋がりが深まり、信頼感がより増すのだと思われる。幅広い年齢の子どもたちが集まるため、職員の対応の仕方を間近で見た子どもたちがエピソード５－２のように「小さい子はカウントしなくていいよ」といった小さい子へ配慮した言葉掛けに繋がったと思われる。

### (5) 子どもと家族とのつながり

〈エピソード５－１〉

カナさんは、帰省中におばあさんから教わったというお芋のようかんが作りたいと職員に申し出る。職員は承諾し、みんなのおやつにと早速カナさんが調理を始め、筆者も手伝う。完成したようかんは、太陽のお部屋のみんなで頂く。

（７日目の訪問　2008年12月６日　13：00頃）

カナさんや小山先生からお話を伺うまで、筆者は子どもたちと実際の家族が触れ合う機会は、あまり無いのではないかと考えていた。しかし、訪問中に子どもたちが家族のもとへ帰省することがあった。

エピソード５－１においては、「おいしく出来ると良いな」と言いながら調理を進めていたカナさんの表情は、普段一緒に遊んでいるときの笑顔よりもずっと活き活きしているように感じられた。それは、カナさんが心の中ではおばあさんを大切に思っており、さらに、普段は職員が担当するおやつ作りを自分が任された事に喜びを感じているからなのではと思われる。

児童養護施設は、様々な思いを抱えた子どもたちが生活する場である。しかし、そこは、決して家庭と切り離された場所ではなく、職員は、子どもたちの背景にある家族の存在に配慮し、子どもたちと家庭とのつながりやそれぞれに結ばれている人間関係を大切にしていることが伺われた。

## ４．まとめ

### ⑴ 児童養護施設における子どもたちの生活を支える子ども同士、職員との関係

児童養護施設では、子どもたち同士の関係、子どもと職員との関係が、子どもたちの生活に重要な役割を果たしていると考えられた。子ども同士の関係では、子ども同士のルールが存在することが推察された。それは、集団生活において、互いが気持ちよく生活するためのものであると考えられる。子どもと職員との関係では、参加観察を通して、対象施設では、職員と子どもたちの間に強い信頼関係が築かれていることが感じられた。それは、トラブルが起きたときの職員とのやりとりや、様々な場面で職員に協力しようとする子どもたちの様子から伺われた。そして、そのような関係は、エピソード４－１や４－２のように、職員と子どもたちが同じ空間で遊ぶことを通して築かれているものであると考えられる。

### ⑵ 児童養護施設・学校・地域・家庭とのつながり

児童養護施設は、様々な思いを抱えた子どもたちが保護されている場所であり、友だちや職員に支えられながら日々成長していく場である。しかし、子どもたちにとっての繋がりは施設のみにとどまらず、学校で出会う教員や友だちとの繋がり、また、お餅つき大会等のイベントを通じて地域とも交流し、帰省等を通じて家庭とも繋がりを持つ子どもたちの存在が浮かび上がった。施設や学校、地域、家庭には、その場所ならではの役割があり、支え合える環境が施設の職員によって様々に配慮されていた。

本研究に協力してくださった、児童養護施設の職員の方々、子どもたちに感謝いたします。

### 引用・参考文献

１）『子どもが語る施設の暮らし』編集委員会，1999，子どもが語る施設の暮らし，明石書店
２）『子どもが語る施設の暮らし』編集委員会，2003，子どもが語る施設の暮らし２，明石書店